

Bブロックの研究のまとめ 【公開授業・研究発表会：令和2年1月31日】
大阪市立田辺小学校（公立）・認定こども園今川幼稚園（私立）・
新生保育園（私立）

公開施設 大阪市立田辺小学校
ブロックテーマ 『『伝え合う』力の育成』
～伝え合う機会を設けたり指導したりすることで伝える力の育成を図る～
施設テーマ 『『表現力』の育成 ～書く力・話す力の育成を中心に～』
指導講評 大阪教育大学 戸田 有一 教授

1 公開授業 会場：大阪市立田辺小学校

○ 就学前施設と小学校との交流会

大阪市立田辺小学校1年生・認定こども園今川幼稚園5歳児・新生保育園5歳児
「好きなものクイズを作ろう！」

講堂に集まり、指導者が「先生の好きなものについてクイズを出すよ！」と3ヒントクイズを出した。3つのヒントを聞いて、子どもたちは、手を挙げ答えを言っていく。正解を聞いた後、指導者が「今日は、グループのみんなでクイズ作りをするよ！」と伝えると、子どもたちからは「楽しそう！」と声があがっていた。

前回の交流会では、グループで「自分の好きなもの」を紹介し合い、ワークシートに記入した。今回の交流会では、前回に紹介し合った「好きなもの」を答えにし、3つのヒントを考えてクイズを作るという活動を行った。

クイズ作りについては、指導者から次の4点を説明した。

- ① 前回に話し合った「好きなもの」の中から答えを決める。
- ② 答えについて、3つのヒントを考える。
- ③ ヒントは、ヒントカードに書く。
- ④ 答えは画用紙に書き、イラストも書く。

その後グループに分かれ、自分たちで好きな場所に移動して活動を行うようにした。ここでは、子どもたちが自分で考え主体的に行動することをねらいとして活動場所を指定せず、



活動開始の合図だけを出すようにした。子どもたちは、グループになると、空いている場所を探し自分たちで輪になって活動を始めた。

クイズ作りでは、まず、何を答えにするのかを話し合った。前回に作成したワークシートをもとに、1年生が「どれを答えにする？」とみんなに問いかけ、答えを決めていった。なかには、意見が分かれて答えがすぐに決まらないグ

ループもあったが、5歳児の意見を聞き入れながら話し合いを進め、答えを決めることができていた。

ヒント作りの場面では、3つのヒントをグループで話し合いながら作っていった。ここでは、指導者が各グループをまわり、ヒントの内容を確かめるようにした。3つのヒントを見て、答えが1つに決めにくいものについては、分かりやすいヒントにするよう声かけを行った。

ヒント作りがある程度できたグループは、役割を分担しながら画用紙に答えを書き、イラストを描く活動を行った。ここでも、1年生が5歳児をリードしながら、一緒にパスでイラストを描く姿が見られた。



最後に、全体で集まり、「クイズ大会」を行った。前に出て発表したグループは、大きな声でヒントを言い、クイズを進めることができた。2回目のクイズ発表では、たくさんのグループが「クイズを出したい！」と手を挙げる姿が見られた。

これらの活動を通して、5歳児は1年生と関わりながらクイズ作りを行い、多くの園児が自分の考えを伝えることができた。また、1年生は5歳児の思いや考えを聞きながらクイズ作りを行うことで、伝え合う力や思いやりの気持ちを育むことができた。

2 各施設の主な研究内容

(1) 大阪市立田辺小学校

『表現力』の育成 ～書く力・話す力の育成を中心に～

【取組】

1年目の実践から見てきた課題を受け、次の3点に重点を置いて計画を立てた。

〈管理職、コーディネーター中心の取組から教職員を含めた組織的な取組へ〉

1年目は、3施設のことを互いに知り合うことから始め、昨年度末には、教職員が気軽に話せるほどの良好な関係を築くことができた。また、小学校教員が知っておいた方がよいことや学ぶことがとても多く、全教員にとって就学前施設が身近に感じられるようにしたいと考えた。

そこで、若手教員を中心に3施設合同の研修会を企画し、夏季休業中に実施した。「エピソード研修」の中から、保幼での一場面が小学校でも普通に起こりえたり、年齢によって指導者の対応が違っていたり、子どもたちの解決方法が異なっていたりと様々な気づきがあった。就学前施設の先生の言葉かけや子どもたちの思いをくみ取る聞き取りの姿勢に感心する教員が多くいた。

〈子ども同士の交流〉

1年目、他のブロックの公開授業・保育を参観して、やはり「Bブロックでも子どもたち同士の交流が不可欠」だと感じた。3施設で2年目の取組について話し合い、子ども同士の交流を計画することになった。

年間で5回程度交流する機会をもつことになった。小学校としては、『書く力』『話す力』の育成につながる取組をどのように組み込んでいくのか、また教育課程にどう位置づけるのか、教科にどうつなげるのかについて話し合った。目標にせまるために、子どもたちを1年間同じグループで活動するようにし、お互いのことを分かり合うようにした。第1回交流会は、名前と顔を覚え、第2回の交流会につないだ。第2回以降の交流会では、子どもたちが進んでグループの友達と関わられるよう、指導者からの指示はできるだけしないように工夫した。次に、国語科での文字の習得に合わせて、「書く」活動を取り入れ、書くために「話し、伝え合う」活動を取り入れるようにした。1年生の子どもたちなりに幼児に関わり、伝えたり、聞き取ったりする姿が見られた。第4回交流会の頃には、「グループ一緒の子」から「〇〇ちゃん、△△くん」へと互いに近い存在になっていった。学年末発表会の1年生のリハーサルを2施設の子どもたちが見に来た時には、手を振っている場面が多く見られた。

〈1年担任・本校教職員との連携〉

1年生の子どもたちが交流するためには、授業時間の中に交流会を組み込まなければならない。1年目は、管理職・教務主任の小さな輪での話し合いで済んでいた。しかし、1年生全体の取組、学校全体での取組に広げるためには、教職員への周知・理解・協力が不可欠となった。職員会議などでの共通理解を図るとともに、当該学年との打合せも必要となった。限られた時間数の中で、1年生児童に教科学習と同等の力をつけることが大切になってきた。1年生の力を把握している担任との連携は、この事業を展開するのにとても大切なことだと感じた。

【成果・課題】

- ・2年間の取組を終えて、小学校の教員が、幼児を理解し、どのような幼児教育・保育を受けてきたのかを知ることとはとても大きな意味があると感じた。例えば、整列の仕方や靴の整理の仕方など、生活の中で年長児は当たり前身に付けてきている。それを小学校に入学してから丁寧に教えることは不必要なことだと思えた。「めざす子ども像」を理解し、小学校での教育に活かすことができれば、もっと質の高い教育を展開できると感じている。
- ・小学校に入学した児童と保護者が漠然とした不安を抱いてしまうことに、小学校の見えない壁があり、それを払しょくするのに有効なのは、就学前施設との連携だと確信した。何度も学校に訪問してきた2施設の子どもたちは、小学校を身近な施設に思ってくれていると思う。4月入学式の翌日からいきなり分からないところで生活するより、少しずつ慣れていく環境を作っていく方がよいのだと思う。また、小学校としても実際に年長児の様子を見ることで、一部ではあるが児童理解にもつながる。これは、児童・保護者だけでなく、小学校にとっても大きな成果だと言える。

- ・ 2年間を経て3施設で良好な関係を築くことができた。次は、今までの取組を継続するための方策が必要となる。そのためには、まだまだ小学校内での共通理解が必要であり、保幼小の連携にかかわる学年担任からのアイデアを引き出すことがよりよい授業・交流になると考える。

◇また、本校校区内には、私立幼稚園がもう2園ある。さらに、その施設との連携・接続もより深いものにしていき、子どもたちも絡めた交流会の実現を考えていきたい。

(2) 認定こども園今川幼稚園

「遊びの中で言葉を獲得する重要性を認識し、様々な経験を重ねるための活動内容を工夫する」

【取組】年長児対象

この年齢は、自覚が始め、遊びが活発になり、個人より、集団で遊ぶことが多い。その反面、もめごとが増え、自分たちで解決することが必要となる局面が増える。

しかし、そういった経験を経て、自分の思いを言葉で伝えたり、相手の思いも理解できたりするようになる。そのため、友達の意見を聞く機会が増え、自分も発言したいという積極的な姿勢も見られるようになる。

〈1年目の取組〉

- ・ 普段の保育の中で、言葉を使う取組を意識的かつ積極的に取り入れた。

- 具体例
- ①ディベートの時間を設ける。
 - ②長期休日明けに、休み中に体験したことを友達の前で発表する。
 - ③なぞなぞ、しりとりをする。

- ・ 子どもの姿

- (1学期) 普段からよく話す子どもを中心に進む。話すことに消極的な子どもにも意見を聞くが、意見を言わないことが多い。
- (2学期) ①②の取組の成果が少しずつ見られるようになり、みんなの前で話すことに抵抗感が少なくなってきた。また、友達の話聞き、同じ経験をした子どもが、付け加えて話すようになる。
- (3学期) ③のなぞなぞがクラスでブームになり、お互いに問題を出し合ったりする中で、知っていることや経験したことを言いたいと思う気持ちが強くなってきた。また、知らない言葉が出てくると、担任に質問したり、図鑑で調べたりして、分かったことを友達に伝えるなど、自発的な行動が増え、言葉遊びの中で伝える・伝わる楽しさや、相手の話を聞く力を育んできた。



〈2年目の取組〉

- ・ 普段の保育の中で、言葉を使う取組を意識的かつ積極的に取り入れた。

具体例 ①ディベートの時間を設ける。

②休日の出来事に加えて普段の生活での体験についても、友達の前で発表する。

③なぞなぞ、しりとりをする。

④帰りの会で今日一番楽しかったことを発表する。

- ・ 子どもの姿

(1学期) ②の取組を中心に1年目の園児と同じく普段からよく話す子どもを中心にすることが進む。1年目の反省を踏まえて、発言に消極的な園児に対しては、答えを文章で求めるのではなく、単語でもよいので、何か答えたら認めるようにすると、発言しにくい子どもたちも徐々に発言をするようになった。

(2学期) 1年目以上に②の取組の成果が見られるようになり、ほとんどの園児がみんなの前で話すことができるようになってきた。友達の話に注意深く聞く姿も見られるようになった。

また、①の取組では、初めは正しい答えを言わないといけないのではないかと考えすぎて答えを言い出せない子どももいたが、いろいろな意見があってもいいんだということが分かってくると、自然と発言が増えてきた。(教員側も答えは提示しない。)

(3学期) 帰りの会の時に、今日、園で楽しかったことを発表する取組をした時、単語で答えていた園児が、「〇〇をして、〇〇だったから楽しかった。」と文章で答えられるようになった。また、普段の園生活では、言葉数が多くない園児でも、取組の中では、しっかりと友達の意見を聞いているので、自分が発表する時には、しっかりと言葉で伝えることができ、それを見た周りの園児から、自然と拍手が起こる場面も見られた。

【成果・課題】

- ・ 園での取組について、1年目に課題であると感じた、「話すことに消極的な子ども」をどう巻き込んでいくかということに関しては、話す場に慣れることから始まり、いろいろな意見があってもいいということが分かりだした頃から積極性が見られるようになった。
- ・ また、伝えられたことを褒められた、友達が聞いてくれた、認めてもらえたという喜びから、1年目にテーマから導かれた「自己肯定感」につながっていると感じられた。
- ・ 園では、幼保連携型認定こども園教育・保育要領に基づき、5歳児に対して小学校教育を見据えた教育を行ってきた。普段の教育・保育の中でも大切にしている「話すこと」「聞くこと」が、今回のテーマである「伝え合う力の育成」であると考え、これからも園独自の取組の中で、子どもたちの力になるように取り組んでいきたいと思う。
- ・ また、Bブロックとしての取組では、各施設の職員間交流を積極的に行うことにより、1年目のテーマでもあった各施設がお互いを知ることができ、結果日々の取組が、小学校のカリキュラムにどうつながっているかをより深く考えることができる良い機会になった。
- ・ また、園児は「新生保育園のお友達が言っていたことがおもしろかった。」など、他園児と

の交流の中から他者を認める気持ちが育つ様子や、田辺小学校の児童に優しく接してもらえたことを覚えていて、自園の年少児に同じように接する場面がよく見られるようになっていた。2年間の取組の中で、園児たちは年長児から小学校への環境の変化への不安感よりも、小学校生活や児童への強いあこがれ、良いイメージがどんどん膨らんでいく様子が見られ、この研究に携われたことを感謝すると同時に、保幼小の連携の必要性を再認識し、続けていくことの重要性を感じた。

◇また、この取組を園から他校へも働きかけていき、連携の輪を広げることを園独自の取組として行っていきたいと思う。

(3) 新生保育園

「私も大切・あなたも大切」

【取組】「思いを伝える」ために必要なこと

① 〈自己肯定感の育ち〉

⇒保育園時代は自己肯定感を育てる時期で、その育ちは自分の思い・意見を受け止めてもえる体験の積み重ねだと考え、日々の生活のいろいろな場面で対話を大切にしてきた。

- ・どんな行動に対しても、「どうしたかったの？」と子どもの思いを聴く。
- ・ケンカや困っている場合、保育者がことのよし悪しを判断するのではなく、子ども同士のやり取りを見守ったり、一緒に困ってみたり、他児に助けを求めてみたりと、できる限り子ども自身が考え自分たちが納得できる道を見つけることができる過程を見守る。

② 〈実体験から生まれる感動〉

⇒「見て！！」「すごい！！」「一緒にしよう！！」など、感動したことは大好きな友だちや身近な大人に思わず伝えたくなり、一緒に感動を分かち合うことは心に響く。

保育園で体験できることもあればできないこともあり、園外保育はまず体験させたいことを考えてから場所を探すようにしている。

- ・遠足・・・甘藷丘、芋ほり、みかん狩り、プラネタリウム、人形劇、そりあそび、花の文化園、チンチン電車貸切など
- ・キャンプ（2泊3日）猪名川

③ 〈言葉の獲得〉

⇒思いを伝えるには、適切な言葉・表現方法が必要である。0歳児から絵本や紙芝居・素話などいろいろな物語を聞くことを大切にしている。大好きなお家の人や先生の声で読んでもらう心地よさは何ものにも代えがたい暖かい温もりを感じ、そうした中で豊かにいろいろな言葉も蓄えられていくのだと思う。

- ・年3回 「おはなしたまてばこ」による読み聞かせ

(2～5歳児；絵本、紙芝居、
ペープサート、大型絵本、
組み木など)

- ・絵本の貸出

(3歳以上児；毎週2冊、
3歳未満児；毎週1冊)



- ・字に興味が出てきたら(4歳頃～)、かるた、しりとり、すごろく、クイズ、手紙ごっこ、言葉あつめゲーム(1文字ずつのカードを組み合わせて言葉を作る)など
- ・ごっこ遊び

【成果・課題】

- ・①②③はこれまでも保育で大切にしてきたことである。今回、小学校の先生や幼稚園の先生たちと交流し、お互いを知ること、それぞれの子どもへの思いを知り話し合うことで、保育園が大切にしてきたことの意味を確認できたことは、大きな成果だと考える。
- ・また、見えない小学校での姿に不安があったが、これも解消することができた。

◇課題は、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」[10の姿]の項目が、今の保育でしているどんなことなのかを具体的に捉え意識しながら保育を振り返ること、またこのような連携が自然な形で継続されていくことが、子どもの育ちを支え小学校への接続につながるのだと思う。

3 Bブロックの研究のまとめ

東住吉区の田辺小学校近隣には、公立の就学前施設がない。最初、保育・幼児教育センターから「連携・接続」研究のお話をいただいたとき、どのように連携していけるのだろうか、同じ考えのもとでやっていけるのだろうか、共通の課題は見つかるのだろうかなどと、大変不安になった。

【1年目の取組・成果】

1年目は、教職員がお互いの施設を見学したり、就学前の子どもたちが学校に来て、学習体験をしたり施設見学をしたりすることにとどまっていた。施設見学をする中で、就学前施設の先生方がきめ細かく子どもたちに寄り添い見守っておられる姿を多く目にしてきた。

【2年目の取組・成果】

2年目は、ぜひとも教職員のふれあいや教員の施設見学、児童と幼児とのふれあいを行いたいと考え、実践した。

教職員が連携し、子どもたちを中心において話し合いを進めていくことで、子どもたちの交流が実現した。子どもたちは、ふれあい、交流を重ねる中で、いろいろな形でのコミュニ

ケーションをとるようになってきた。決して言葉でスラスラ気持ちを伝えるということではないが、相手の表情やしぐさなどから、それぞれの感性で、相手のことを考え、思いやり、言葉がけをし、行動するような姿があらこちらで見られるようになってきた。

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」〔10の姿〕の「道徳性・規範意識の芽生え」として友達と折り合いをつけたり、「思考力の芽生え」として自分と異なる考えがあることに気付いたり、「言葉による伝え合い」として相手の話を注意して聞いたり、言葉による伝え合いを楽しんだりというような力を身に付ける一端となったのではないかと考える。

小学生（1年生）は、就学までに育てていただいたそのような力を、ますます発展させていったのではないかと考える。つまり、子どもたちによって、学びの連続性が立証された。

研究を通して、就学前施設の先生方には、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」〔10の姿〕を日々の活動によって育ていただき、小学校はそれまでの学びをベースに、教育活動を計画推進していくことが、滑らかな接続につながり、子どもたちのためになるということがよく分かった。そのために、教職員がお互いを知ることが本当に大切だと考える。何より研修で今川幼稚園にお世話になった本校の教員の「幼稚園の子どもたちって、あんなにいろいろなことができるということに驚きました。」という一言が、それを如実に物語っていると思う。

【課題】

- ・いろいろなところで目にする5歳児の素晴らしい活躍や立派な姿があるにもかかわらず、小学校入学とともに「何もできない子ども」たちとして扱ってきた傾向のある小学校の指導体制を、しっかり見直さなければならないと強く思った2年間であった。
- ・また、就学前施設には、もっと小学校での様子を知っていただき、「ぜひ連携しましょう」と呼びかけていただきたいと思う。来年度から全面実施の小学校学習指導要領にも、「教育課程の編成の項目において、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を踏まえた指導を工夫することにより幼稚園教育要領等に基づく幼児期の教育を通して育まれた資質・能力を踏まえて教育活動を実施し・・・」と明記されている。本校でももちろんのこと、小学校では就学前の学びをもっと知り、それを発展させる形の学習活動を考えていかなければならない。そのためには、教職員での共有が必要である。
- ・本ブロックでは、この2年間の研究を受けて、来年度からどのような保幼小の「連携・接続」を行っていくか検討中である。目的を明確にし、子どもたちにとって有意義な連携を実施していきたいと考えている。

4 指導講評 講師：大阪教育大学 戸田 有一 教授

正直なところ、取組を始める前は、1年間終わったときに、こんなによい形になるとは想像していなかった。年に4回も交流できたことは、たいへんな努力と調整があったことと思う。当初、私から、子ども同士の作品の交流でも良いのではないかと提案したこともあった。保育園・幼稚園・小学校の場所が離れており、交流するにも移動時間がかかる。

また、どの時間に設定するか、始まりの時間などの調整は大変だったと思う。それが年に4回も交流できたこと自体に、まず、とても価値があると感じる。

初回は、お互いの交流をし、グループの名前を決め、好きなものの紹介を行った。いいなと思ったのは、最初にグループ名を決めていないところ。はじめは、お兄ちゃん、お姉ちゃん、5歳児という関係で交流をし、学校案内を行った。その次にグループ名を決めたのが興味深い。お互いが交流をもった後に、自分たちでグループ名を決める場をもつことで、活発な意見交流ができていた。「好きなものを紹介しよう！」の交流ではお互いの「好きなもの」を出し合い、



個性を出し合うことができた。ここでは、「好きなもの」を交流し合う場を設定することで上下関係がなく、紹介することができた。ただ単に「好きなもの」を言うだけでなく、理由も挙げることができていた。「好きなもの」を述べ合うなかで、子ども同士のつながりをもつことができた。

今回がクイズ作りということで、クイズ（なぞなぞ）は適切で絶妙と思った。なぞなぞはこの時期の子どもたちが大好きで、意欲的に取り組むことができていた。クイズ大会をする際に、先生が最初に「なぞなぞを出したい人」と聞いたときは、あまり手が挙がらなかった。しかし、2回目になると、たくさんのグループがやりたいと手を挙げるようになった。なぜ、2回目はたくさん手が挙がったのか。それは1回目のグループのおかげ。間違った回答（そもそも、なぞなぞに当てはまる回答は多数あるのに正解不正解があり、間違いとされた子が「これも正解では？」と言わないのが興味深い）に、お笑いっぽい感じで「違います」と元気に答えた姿が好印象だった。（後で尋ねると、クラスの「お笑い係」に立候補し、お笑い芸人をめざしているとのこと）

羽曳野の幼小中が同一校舎にある学園の先生のお話をうかがったが、かつては、「子どもを横に比べる」という目線で教育を行ってきたとのこと。同じ学年の中で個性があるとか、できるできないなどの視点で見てきた。ところが、幼児期から知っている子たちが中学生になるので「子どもを縦に見る」ようになった。幼児期からの関わりがあり、「小さい頃」も知っている「近所のおっちゃん」の位置も得たとのこと。この「縦のつながり」を大事にすることがこれからの教育に必要であり、保幼小の連携、小中連携は重要な取組である。今後、どのようにして交流の機会を継続していくのかについては、時間の制約もあるため、検討していかなければならない。

本学の初等教育教員養成課程では、小学校教育専攻と幼稚園教育専攻の共通で、「幼小連携教育論」という講義を3回生に開講している。養成校在学中に、幼小連携についてしっかりおさえて、先生になる流れとなっている。「縦に見る」という教育の素地がすでに大学教育で行われており、今後、幼児教育から小学校教育への更に円滑な接続が期待される。

5 参加者のアンケートから

〈就学前施設〉

- ・実際に1年生と年長児の交流を見て、言葉のやり取りや、クイズ発表時の様子などを通して、年長児は1年生になることに期待がもてるだろうと感じた。保育所、幼稚園だけでは体験できない1年生との貴重な交流がとてもよい機会意識的にできたらと思った。
- ・「連携」についてあまり考えてこなかったが、今日、いろいろ見せてもらい、戸田先生の話聞き、考えることが多々あった。
- ・発達の連続性を意識しながら保育することが大切と捉えながらも、小学校との連携で具体的に何をすればよいか分からず今日参加した。一人ひとりの子どもを継続して見るということは子どもがより安心して育つ環境につながると改めて学んだ。実際に交流の様子を見せてもらったことは非常に分かりやすくヒントをいただいた。支援する側がつながりを共に考え、子どもを中心に置いて進めることが重要だと思った。
- ・公開授業では、グループによって進め方、進み方が違う姿を見て、興味深いものだった。小学生が保育園児と幼稚園児をリードしたり、気にしたりする姿はとても大切なものだと改めて感じた。子ども同士の関わりも大事だが、職員同士の連携の必要性がよくわかり、大変なことだと話されていたが、それ以上の成果があるのだなと知ることもできた。今後、さらに連携が必要になってくるので自園でも何かできることはないか考えていきたい。

〈小学校〉

- ・就学前施設で育まれた子どもたちの自尊心が今の小学校で受け入れることで、もう一度リセットされてしまうような気がした。今日の田辺小学校の子どもたちは確かにお兄ちゃんお姉ちゃんの顔をしておりたくましい顔だった。これをつないでいくことが大事だと思った。
- ・授業を参観して実践内容がよく分かった。1時間のほとんどが子どもたちの活動で、子どもが主体的に活動している姿が印象的だった。4回の活動内容はよく練られていて勉強になった。幼保の先生方の話が聞けたことも良かった。

<Bブロック 1月31日交流計画案>

本時の活動

<主な活動>グループの友達とクイズ作りを行うことができる。

<ねらい> 5歳児…1年生と関わりながらクイズ作りを行い、自分の考えを伝えることができる。

1年生…園児の思いや考えを聞きながらクイズ作りを行うことで、伝え合う力や思いやりの気持ちを育むことができる。

| 時間 | 活動内容 | 指導上の留意点 | 育てたい力 (○…1年生 ☆…5歳児) |
|-------|---|--|--|
| 13:30 | ○講堂に集まる。 | ○今川幼稚園、新生保育園、田辺小学校とに分かれて並ぶことができるよう声かけを行う。 | ○☆きまりを理解して並ぶことができる。 |
| 13:35 | ○「好きなものクイズ」を見る。 | ○「好きなものクイズ」の見本を見る場を設けることで、本時で行うことをイメージしやすくする。 | ○☆クイズを楽しむことができる。 |
| 13:40 | ○「好きなものクイズ」を作ることを知る。 | ○クイズは3ヒントとし、3つのヒントから連想して答えを見つけることができるようなクイズ例を提示する。 | ○☆クイズについて理解することができる。 |
| 13:45 | ○「好きなものクイズ」の作り方を聞く。 | ○グループ間で「伝え合う」活動を活発に行うことができるよう、「好きなものクイズ」作りを行う場を設定する。 | ○☆活動の目的や見通しをもつことができる。 |
| 13:50 | ○1年生はグループカードをもち、グループごとに分かれる。 ○園児は、自分の持っているカードをもとに、自分のグループを探していく。 | ○「好きなものクイズ」の作り方 ①グループの中で誰の「好きなもの」についてクイズを作るのかを話し合って決める。 ②クイズにする「好きなもの」について3つのヒントを話し合って作る。 ③話し合ったことをもとに、3つのヒントをえんぴつでヒントカードに書く。 ④画用紙に、答えとなる「好きなもの」をパスで書く。時間があれば絵も描く。 | ○指導者の話をよく聞き、内容を理解することができる。 ○クイズ作りの順序を理解することができる。 ☆クイズ作りへの関心をもつことができる。 |
| 13:55 | ○グループごとに輪になって広がる。 | ○グループごとに分かれる活動を通して、1年生児童が園児に声かけを行い、思いやりの気持ちを育むことができるようにする。 ○園児に色分けしたカードを渡しておくことで、同じグループの1年生が声をかけやすいようにする。 | ○周りの様子を見て、困っている園児がいたら声かけをすることができる。 ☆わからないときや困っているときに、自分の気持ちを表すことができる。 |
| | | ○グループで活動する場所は、子どもどうして好きな場所に行き活動できるよう支援する。 | ○園児を優しくリードしながら行動することができる。 |

| | | | |
|-------|---|--|--|
| | <p>○「好きなものクイズ」作りを行う。</p> | <p>○それぞれのグループを回り、スムーズに活動できるように支援する。</p> <p>○子どもたちが対話をしながらクイズ作りを行うことができるように見守る。</p> <p>○活動が停滞しているグループには、前回作成した好きなものカードを見るように伝える。</p> <p>○クイズ作りが終わったグループについては、3つのヒントを見て、みんながわかりやすい問題になっているのかを考えるよう伝える。</p> <p>○ヒントカードが書けたら、画用紙に答えとイラストを描くように伝える。</p> | <p>○相手の思いを聞き取りながらあたたかい気持ちをもって活動することができる。</p> <p>☆自分の思いを伝えたり、相手の話を聞いたりする。</p> <p>○☆ヒント作りを通して、伝え合う力を育むことができる。</p> |
| 14:15 | <p>○活動終了・後片付けをする。</p> <p>○グループごとに集まる。</p> | <p>○後片付けをする場面では、1年生が自主的に動き、園児と協力して片付けをすることができるように助言する。</p> <p>○グループで集まる際にも、指導者が誘導するのではなく、1年生がリーダーシップをもって行動できるよう支援する。</p> | <p>○園児を手助けしながら、共に楽しんでイラストを描くことができる。</p> <p>○☆自分の思いをイラストに表すことができる。</p> <p>○☆協力して後片付けができる。</p> |
| 14:20 | <p>○「好きなものクイズ」発表を行う。</p> | <p>○「好きなものクイズ」発表を行うことで、みんなで楽しくクイズを楽しむことができるようにする。</p> <p>○クイズを伝えるグループは、大きな声で相手にわかりやすく伝えることができるよう助言する。</p> <p>○3つのヒントを「聞く」場をもつことで、「聞く」「推測する」力を育むことができるようにする。</p> | <p>○☆クイズを共に楽しむことができる。</p> <p>○☆相手の話をしっかり聞くことができる。</p> <p>○相手にわかりやすい声で伝えることができる。</p> <p>○☆ヒントを聞き、答えを推測することができる。</p> |
| 14:30 | <p>○終わりの言葉を聞く。</p> | <p>○終わりの言葉を聞くことで、今日の活動でのがんばりや成長を感じることができるようにする。</p> | <p>○☆今後の活動への期待をもつことができる。</p> |

Cブロックの研究のまとめ 【公開授業・研究発表会：令和元年11月26日】
 大阪市立古市小学校（公立）・大阪市立旭東幼稚園（公立）・
 大阪市立森小路保育所（公立）・認定こども園あけのほし幼稚園（私立）

公開施設 大阪市立古市小学校
 ブロックテーマ 「発達や学びの連続性を踏まえた 就学前教育と小学校教育の在り方」
 ～ドキュメンテーションを軸に教育活動を可視化する～
 施設テーマ 「就学前教育で育まれた資質・能力をつなぐ教科学習の展開」
 指導講評 奈良教育大学 横山 真貴子 教授

1 公開授業 会場：大阪市立古市小学校

(1) 1年国語科

「くらべながらよむとよくわかるね『どうぶつの赤ちゃんかいぎをひらこう』」

本単元では、前の学習「いろいろなふね」で二つの事物を比べながら読むとよく分かるということを経験した児童がライオンとしまうまを比べながら、表に書きまとめたり絵から読み取れることを話し合ったりしながら内容を理解し、読書活動につなげていく学習である。

幼児期につけた「言葉による伝え合いを楽しむ姿」を友だちとの感想交流に、「感覚的なイメージを膨らませたり心動いたことを言葉で表そうとしたりする姿」を書きまとめる力につないでいくよう学習を構成した。

本時では、「へえーポイント」「おーポイント」「なるほどポイント」と自分が感じる一文を選び、理由を書き、書いたものを友達と交流しながら読みを深めた。



本時の板書

また、相違点を「おわり」の一文として書き全体でも交流している。心が動くということを大事にしながら教材文を読み、読んだことをもとに自分なりのまとめを文章で表すことができた。



書いたカードの交流

【子ども達書いた「おわり」の一文】

- ・どちらのどうぶつもサバンナにいて、どちらもやさしくそだてられます。
- ・どうぶつの赤ちゃんは、よわい生きものとつよい生きものもいます。どちらの赤ちゃんもおかあさんにまもられています。
- ・どちらのどうぶつも赤ちゃんを大せつにしています。
- ・どうぶつによってせいちょうのしかたがちがいます。
- ・どうぶつの赤ちゃんがどうやって大きくなるかがわかりましたか。どうぶつのあかちゃんはこうやって大きくなっていきます。
- ・どちらのどうぶつもおちちをのんだり、お母さんのするのをみておぼえます。

(2) 2年音楽科

「ひょうしをかんじリズムをうとう『ボディーパーカッションであそぼう』」

旭東幼稚園の園長先生をゲストティーチャーに迎え、担任と一緒に立案から授業づくりに取り組んだ。単元全体を通して子どもたちが主体的に学ぼうという姿が見られた。園長先生と楽しい時間を過ごし、人間関係を深めることで、「次は園長先生に歌を聞いてほしいからがんばろう」という声が聞かれた。また、園長先生が持って来てくださる幼稚園の子どもたちのドキュメンテーションやお手紙の交流も、子どもたちにとって楽しみの一つになった。幼稚園の子どもたちに伝える動物クイズ作りでは、相手意識をもった言語活動となり本時へ展開し教科横断型の学習となっている。本時については、子ども一人ひとりがその子らしく楽しみながら学べる音楽の授業を作ろうと園長先生と話し合いを重ねた。

ボディーパーカッションを取り入れ、たくさんのリズムを鳴らす学習を行った。子どもは園長先生が行うボディーパーカッションに興味をもち、生き生きとリズム遊びに取り組むことができ、音符や休符を学ぶ前段階でたくさんのリズムに触れるよい機会となった。その後の楽典事項を学んだり、リズム伴奏を演奏したりする学習でも本時で学んだことを活かしていくことができた。

連携にも様々な形があり、アイデア一つでとても取り組みやすくなることを、経験をもって実感し、教師自身の視野も広げていくことができた。



園長先生とリズム遊び



ボディーパーカッションを楽しむ様子

(3) 5年生と5歳児の交流活動

「シャボン玉遊び」

今回の取組を通して、下の学年に対する優しい言葉遣いや態度、来年度最高学年になる5年生児童にリーダーとしての自覚をもたせるということ、自分たちで協力し、責任をもってそれぞれの役割をやりきる中で自己肯定感を高めることをねらいとした。生活班で各コーナーを担当し計画から準備まで自分たちで責任をもって取り組んだ。

どのコーナーも保育所の子どもたちが喜んでくれるように、5年生と保育所の子どもたちが一緒に活動できるという視点で準備してきた。本時では、一緒にしゃぼん玉作りをしたり、保育所の子どもたちに目線を合わせて優しく教えたりして楽しく交流する姿が見られ5年生と保育所の子どもたち両方が笑顔あふれる会となった。事前の活動から事後の活動まで話し合ったことをもとに、役割を分担し、全員で協力しながら実践することができた。また、実践後



ケーキ作り体験コーナー



活動の振り返り

に保育所とドキュメンテーションで振り返りを行うことで、自分自身のよかったところや協力・創意工夫の大切さに気付けた。

互いに協力し活動する中で、満足感や連帯感、充実感などをもち自己有用感を高めることができた。この保育所との交流の経験を活かして、来年度は最高学年として、たてわり班や登校班のリーダーとしての自覚をもって頑張ってもらいたい。

2 2年間の主な研究内容

(1) 大阪市立古市小学校

「就学前教育で育まれた資質・能力をつなぐ教科学習の展開」

【取組】

1年目の研究では、施設長同士の交流を図りながら各施設の教育活動の理解を深めることから始めた。本校は多くの就学前施設から子どもたちが入学してくる。全ての施設が、小学校の近隣にあるわけではなく、各施設の子どもたちが交流することは困難であるということが話し合われた。しかしながら、児童、幼児が交流することだけを「連携・接続」と呼ぶのだろうか、何か手立てがあるはずである。1年目は、このことを念頭に置きながら、幼児と児童の学びを知ること、それぞれの教育活動の中にある学び（学びの芽）を見つめることを目標に保育参観や授業参観を互いに行うこととした。

2年目へと研究を移行していくにあたり、実際の授業実践の中で幼児期の学びの芽をつないでいく必要性を感じ、全教職員での取組とすることを計画した。学校の研究組織として、保幼小連携・接続推進委員会を組織し、1年間の取り組みを立案した。また、「幼児期の学びの芽をどう見るか」ということについても、奈良教育大学 横山真貴子教授にご指導をお願いし、教職員の全体研修を年度当初にもっている。保幼小の連携・接続が年長児と1年生だけのものではなく、乳幼児期からの学びの連続性として学校全体で取り組むことを年度初めに教職員の共通理解が図られた。

「幼児期の学びの芽をどう見るか」ということについて考えたことをきっかけに、教育活動を可視化していくことを研究の柱に置くこととした。Cブロックの研究テーマのサブテーマを「ドキュメンテーションを軸に教育活動を可視化する」とし、①ドキュメンテーションというツールで各学年をつなぎながら、また就学前施設ともこのツールが活用できないかということの研究していくこととした。

また、②授業実践の中で、「幼児期の学びの芽」を接続したり、連携したりしていく必要があることについても話し合い、資質・能力の「接続」、教職員の「連携」、子ども同士の「交流」の3つのコンセプトで授業を組み立てることも立案した。

2年目の研究の柱①ドキュメンテーションの活用について②「接続」「連携」「交流」をコンセプトとした授業づくりについて以下にまとめる。

① ドキュメンテーションの活用について

ドキュメンテーションというのは、一言で言うなら教育活動の記録である。もともとは

イタリアのレッジョ・エミリア市で保育を保護者に伝達するために作成された記録のことである。保育の場でその活動の中に何を見取るのか、ということが書かれている場合が多い。そこで、小学校でも活用することを考えた。学習や活動の中に子どもの学びの何を見取るのか、子ども自身が気付いたことをどのように自覚するのか、ということをも可視化できるものとして各学年で継続して作成に取り組んだ。



各学年のドキュメンテーション

また、ドキュメンテーションを施設間で往復書簡のようなツールとして活用した。旭東幼稚園の園児に国語科の学習の「動物クイズ」を届けた2年生は、そこから園長先生との交流を重ね、音楽科の授業にゲストティチャーとして招く、ということに展開している。

また、森小路保育所の「しゃぼん玉あそびのドキュメンテーション」を見た5年生は、「もっとおもしろいことを保育所の子どもたちに教えてあげられるよ！」と活動を自分たちで計画することにもつなげた。公開授業終了後には5年生が交流の振り返りをドキュメンテーションにして森小路保育所に届けている。

夏休みにはドキュメンテーションを作成するCブロック教職員合同研修会を行っている。



ドキュメンテーション研修会

各施設から持ち寄っていただいた保育の写真を用い、保幼小施設混合で編成されたグループで「学びの芽の見取り」をしながらドキュメンテーションの作成を行った就学前施設の教職員の方々が保育をいきいきと話されている姿が印象的で、子どもの育ちを語り合う楽しいひと時を共有できたことも大きな成果であった。

② 「接続」「連携」「交流」をコンセプトとした授業づくり

| | |
|-----------------------|--|
| <p>資質・能力をつなぐ「接続」</p> | <p>1年生 国語科 「くらべてよむとよくわかるね ～どうぶつ赤ちゃんかいぎをひらこう～」</p> |
| <p>教職員間の連携を図る「連携」</p> | <p>2年生 音楽科 「ひょうしをかんじてリズムをうとう ～ボディーパーカッションであそぼう～」</p> |

| | |
|--------------|---------------------------------------|
| 子ども同士の交流「交流」 | 5年生 学級活動 「5歳児との交流活動 ～しゃぼん玉あそび～」 |
|--------------|---------------------------------------|

【成果・課題】公開授業後に行われた全体会より

〈授業者より〉

- ・幼児教育を知ることにより子どもを理解することが大事なんだということに改めて気付かされた。教育のやり方は違っても、子どもを理解し子どもの育ちを見つめることの大切さをこの取組を通じて感じる事ができた。

〈参観者より〉

- ・学校全体で幼児教育のことを理解しようとされた取組に感激した。幼児教育側も頑張らなければいけないと身が引き締まる思いになった。

〈横山先生のご講評〉

- ・ドキュメンテーションというアイテムで学校全体、施設間をつないだ取組がよかった。交流では子どもたちがいきいきして互恵的な取組の大切さを感じた。そして連携の新しい形の提案も面白い。また、接続として幼児教育で育まれた資質・能力が教科学習にどうつながっていくのかについても示唆があった。今後、事業終了後も取組が続くことをお願いしたい。

(2) 大阪市立旭東幼稚園

「遊びや生活の中で、幼児期における資質・能力を育む」

【取組】

① 子どもの実態を把握する ドキュメンテーションで可視化

子ども一人ひとりの発達や興味・関心を把握し内面理解に努め、行動の背後にあるものを捉え、課題を明確化した保育案の見直しや、園内研究、実践記録をとり分析した。保育の振り返りをする事で幼児理解を深め、次の遊びの展開に活かすことへとつながった。

また、子どもの実態を踏まえて、子どもの育ちや学びの姿など、ドキュメンテーションを通して可視化することを意識した。園内では保護者にクラスだよりで伝えたり、保幼小連携・接続2年目新たな取組をしたりして、児童と幼稚園の子どもたちとの交流を深めるツールとして、ドキュメンテーション交流を行った。

② 子どもが主体的に活動したくなるような教師の教育的意図をもった働きかけや環境・援助を工夫する

幼児教育は環境を通した教育と言われている。ただ遊んでいるだけではなく、子どもたちが身近な環境に関わり、意欲的に様々な活動に取り組めるように、自然との関わり・生命尊重を大切にする気持ちをもてるような機会を積み重ねてきた。集団生活や異年齢活動



幼稚園から小学校へ送った
ドキュメンテーション

を経験する中で、少人数を活かした保育を行い、互いのよさに気付き認め合えるような保育の振り返りの時間を設けてきた。

③ 「幼稚園教育要領」「就学前教育カリキュラム改訂版」「大阪市立幼稚園教育研究会 参考教育課程 世界を拓くなにわっ子」等について学びを深める

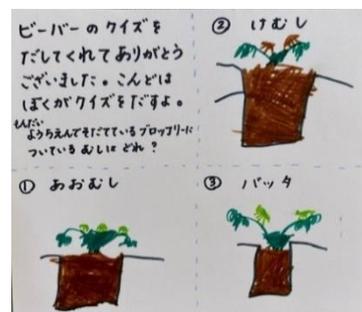
本園の実態と照らし合わせながら、「幼稚園教育要領」「大阪市教育振興基本計画」「就学前教育カリキュラム改訂版」「大阪市立幼稚園教育研究会 参考教育課程 世界を拓くなにわっ子」等を活用すると共に指導計画の見直しを図ることに努めた。指導改善に活かすことや教職員間で互いに共通理解を図るといった点では、園内研究保育（年間6回）後に意見交換を重ねる機会や、11月に実施した保幼小連携・接続事業の一環である相互参観を通して、互いの教育内容について理解を深め、教員の資質向上につながる研修会を実施した。

【成果・課題】

ドキュメンテーションを活かした保幼小連携・接続交流では、教員が『子どもの育ちの芽』を見取る力が大切であることや、学びの芽が小学校への学習につながっていくことを再認識することができた。遠方だから難しいという課題を覆す『連携・接続・交流』となり、教員自身が子どもの「学びの芽を意識する」ことへとつながった。

7月のCブロック合同研修会では、就学前施設の教職員が子どもたちの遊び込んでいる写真を持ち寄り、小学校の先生方と「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」[10の姿]を共有することによって互いの教育について学び合う合同研修会を実施した。奈良教育大学 教授横山真貴子先生から、ドキュメンテーションについて拝聴し、写真から『子どもの育ちを語る』『資質・能力を語る』『子どもの学びの芽が、どこにあるのか?』など、子どもたちの育ちを見取ることや『幼児はただ遊んでいるだけではない』ということなどを討議し、互いの教育について理解を深めた。この時、小学校の先生方から、泥んこ遊びの姿が理科の「大地のつくり」につながることを教えて頂き、小学校教育について知る一歩、二歩となった。改めて幼児期の間をしっかり遊び込んでおく経験が大切であるということ再認識し、幼児期の先行経験が、小学校以降の学習意欲にもつながることを学んだ。就学前施設の教職員こそ小学校教育を知り、保育で何を意識し実践していくのか引き続き学んでいく必要性を感じた。研修会では、互いに分からないことも尋ね合える信頼関係があったからこそ『連携・接続・交流』について学びを深める研修となった。

また、2年生が国語科で学習したことを、友達と協力しながらビーバーのクイズを考え、児童が出題している動画を送り届けてくれた。幼稚園の大きなスクリーンで動画を見た園児は、とても真剣な眼差しで見入っており、クイズに正解すると大喜びであった。その後「おにいちゃん、おねえちゃんに絵の手紙を描きたい!」「ぼくたちもクイズを出したい!」と言って思いを込めながら絵をかく姿に、憧れや喜びいっぱいの気持ちを抱いている様子が伝わってきた。実体験を通して心が動く経験は幼児期においても大切であると言える。



幼稚園の子どもたちが2年生の子どもたちにクイズを出題した

また、11月の保幼小連携・接続事業相互参観(造形)では、奈良教育大学教授 横山真紀子先生にご指導いただいた際、『教師は子どもたちが考えられるような言葉がけをすること』『子どものこだわりのポイントを知って伝えること』『どれくらい子どもの力があるのかを知ったうえで保育を進めていくこと』が大切であることなどを再認識できたことと、5歳児の振り返りの時間では子どもたちと一緒に何が上手くいかなかったのか、失敗から学ぶことなどを互いに話し合い、応答性のある振り返りも5歳児になれば大切であることが分かった。積み上げられた生活がリズムとしてあり、4歳児が5歳児の姿を見て『面白そう』といった場面の中で憧れとの出会いがあり、『見て』『真似て』『試す』といった実体験が感動体験を生み出し、教員や友達と共感する積み重ねが『学びの芽』につながるということが分かった。就学前施設として小学校へ引き継いでいくために『子どもの学びの芽』とは何かとすることを今後も探り、遊びや生活の中で、幼児期における資質・能力を育む幼児教育・小学校教育の連携・接続の在り方について、学んでいきたいと考えている。



幼稚園の子どもたちが2年生の子どもたちにお礼の絵手紙をかいた

(3) 大阪市立森小路保育所

「主体性を育む保育を学び合い、子どもたちの考える力の基礎を育む」

【取組・成果】

1年目は施設長を中心に互いの学びの姿や教育の在り方を知ることからスタートし、相互参観、意見交換等を通して、様々な学びの姿について知ることができた。

2年目は教職員間でも互いの教育について学び合えるように取組を進めていくということで、7月に4、5歳児の担任が4施設合同のドキュメンテーション研修会に参加した。

保育所での遊びや活動の姿を事前に写真に撮り、その姿からどんな力が育まれているのか、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」[10の姿]のどれにつながっているかなどを写真で振り返りながら教職員間で話し合い、当日はその写真を持ち寄り、小学校の先生方と意見交換を行った。

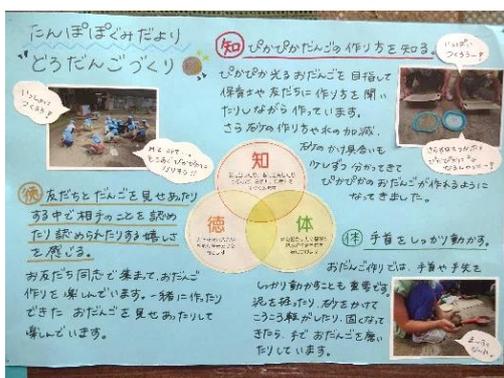
就学前施設では、遊びや活動の中で様々な力を育てているということを知ってもらえたこと、また、この活動が小学校でどのような学びにつながるのか、実際に小学校の先生方の意見を直接聞いたことはとてもいい機会になった。(遊びの中にある学びを可視化し、小学校での教育にどのようにつながっていくのかを互いに知り合えたことがよかった。)

9月に5歳児が保育所の研究テーマをねらいに位置付けながら公開保育を行い、横山先生をはじめ他のCブロックの先生方にも意見をいただいた。今年の5歳児クラスの特徴として、集団の中での自分という意識をもちにくい子どもが多く自己主張が激しくトラブルが絶えない現状があったため、ある程度保育者が次の活動への動きを指示したり、



公開保育での大縄跳び

保育者が用意した環境の中で遊びを進めたりしていたが、そんな中でもまわりの友だちに目を向ける言葉かけや、グループでの話し合いの場面など見られ、子どもの育ちにつながっている姿があると評価をいただいたり、もっと子どもたちにいろいろなことを委ねていったらいい、得意なところで一人ひとりがスポットライトを浴びる場面を作ることによって評価を高め合える、保育者が思っている以上に子どもは育っているといった貴重なご意見もいただいた。所内でも5歳児クラスだけに限らず、子どもたちが自ら選んだり、考えて試したりしてやってみようと思える環境を用意し、主体性を育む保育について保育所全体で取り組んでいる。



知・徳・体の保護者向けポスター

その他の取組としては、行事の機会を利用して保護者に、どのような力が育ってきたのか、育みたい力は何なのかを「知・徳・体」に分類して写真を示しながら伝えている。

これも一つの学びの姿の可視化で、保護者に対してだけでなく、作る過程において保育者自らの学びの振り返りにもつながっていると思われる。

【課題】

今回このような取組を通して就学前教育の重要性の再認識と、その就学前教育の中で育んできた学びの力がどのように小学校教育につながって行くのか、非常に興味深くもっと知っていきたいと感じることができた。

自分たちが日々取り組んでいる遊びや活動が「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」[10の姿]のどこにつながっているのか、イメージしながら取り組んでいくことや、一人ひとりの子どもを理解することの大切さを教職員間で共有するとともに、今後はこの2年間の研究事業の取組をきっかけとして、次年度以降も継続して進めていく取組について施設間で検証し、所内で情報共有しながら実践につなげていきたいと思う。

(4) 認定こども園あけのほし幼稚園

「就学に向けて、生活習慣を整え、自立心を育てる」

【取組・成果】

1年目は、各施設の公開保育、公開授業を通して職員間の意見交換や、講師の先生からの助言をいただき、今後の保育の在り方について考える機会となった。

2年目は、7月の古市小学校の職員とのドキュメンテーションの作成・交流会で、子どもの育ちや学びを可視化することにより、幼児教育の遊びが小学校での教科にどのようにつながっているかということを学ぶことができた。特に、保育の現場で子どもに関わる教職員がこの研修会に参加することにより、小学校の教員と「子どもの育ち」について意見交換し、保育と教育の違いやつながりについて考える機会となり、研修会での学びを園に持ち帰り、小学校につながる活動や生活習慣を見直し、年長後期の保育がどのように小学校生活につながっていくのかを考慮した保育計画の必要性を再認識することができた。

10月には、『就学に向けて、生活習慣を整え、自立心を育てる』を研究テーマとして、年長

3クラスの公開保育を実施した。この時期の年長児の実態として、“自分の思いをうまく伝えられず、トラブルになり、担任が互いの思いを聞き取り、相手の気持ちを考えて思いを伝えられるよう配慮しながら関わっていること”、“生活習慣の自立に向けて身の回りのことを丁寧に行うこと”、“遊びや活動の中で自分の課題に向き合いながら継続的に取り組んでいる”ことを挙げ、生活習慣や製作活動、運動遊びの様子を見ていただいた。

公開保育の後、講師の横山真貴子先生、各施設長、教職員から、意見、講評をいただき、自園の保育の在り方を見直し、課題となる点について、今後どのように取り組むべきかを考える機会となった。



【課題】

今後の課題として、就学に向けての生活習慣の自立と整えを基盤とし、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」〔10の姿〕につながる子どもの主体的な活動について、カリキュラム考案の段階で、子どもの表現力を引き出せるような内容であるかを考慮することや、実践では、子どもがもっている力を大切にしながら、環境や教材の準備の工夫の仕方や、子どもの心を動かす声のかけ方を配慮していくこと、また、遊びの中で繰り返し取り組んだ活動が体力作りや体幹作りにつながるようにしていくこととし、保育実践の中で活かせるようにしていきたい。

3 研究のまとめ

【1年目の研究】

1年目は、Cブロックとして『保幼小連携・接続』の捉え方と研究の方向性を明らかにしながら研究を進めていった。年度当初に年間計画をたて、先の見通しをもちながら毎月1回行われる研究会では話し合いをもち事例の検討なども行った。

また、各校園所、保育参観・授業参観・意見交流を行い、11月には全市対象に旭東幼稚園にて公開保育も実施した。

まずは、「保幼小連携・接続」は次の2点を「知ること」が第1歩になると考えた。

- ・幼児と児童の学びの姿を知ること
- ・幼児教育・小学校教育それぞれの教育の学びを知ること

さらに、3つの観点を念頭に置くことが重要であると共通理解をした

- ・育てたい子どもたちの姿とは、どのようなものか
- ・遊び・体験が、どのような学びの姿につながっているのか
- ・幼児期の学びの姿が、小学校教育にどのように接続していくのか

1年目の取組を通して各校園所で 次の2点について共通理解をした。

- ① 幼児教育において「育みたい資質・能力」〔3つの柱〕は、5領域の活動を通して育ち、

その具体的な姿として「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」〔10の姿〕により、一人ひとりの子どもの育ちを整理して捉え、発達の連続性、教育の連続性として、小学校以降伸ばしていくべき子どもの在り方を捉える基本的な枠組みであるということが見えてきた。

- ② 小学校で全てにおいて、新しいことを経験するのではないので、「幼稚園でもやっていたよね」という、教員の声掛けと同時に「幼稚園と全く同じではなく、小学生になって成長したという意識」を子どもにもたせることが、教育の「連携・接続」になる。

遊びを通した総合的な指導の中で、幼児期の学びはどうだったのか？それが小学校以降どのように活かせるのか、就学前施設である保育者が考慮すべき点である。

2年目へ向けての課題として、各担任同士が、より具体的な教育活動のつながりを検討することや、そのためにも、計画的な事前事後の打ち合わせを密に取り実践していきたいと考えた。

【2年目の研究】

1年目に引き続き、年度当初に年間計画を立て、先の見通しをもちながら毎月1回行われる研究会では、話し合いをもち事例の検討なども行った。互いに保育参観・授業参観・意見交流を行い、11月には全市対象に古市小学校にて公開授業を行うなど研究の方向性を明らかにしながら進めていった。

2年目、特に重視した取組は、教育活動の可視化、そのために、ドキュメンテーションという方法を各施設で取り入れ、お互いの教育活動を可視化して、知り合っていくということを実現化した。

全ての施設が、小学校の近隣にあるわけではなく、各施設の子どもたちが交流することは困難である。子ども同士の交流だけが「連携・接続」と捉えがちではあるが、ドキュメンテーションを取り入れることでまずは教職員の「連携・接続」を試みることにし、早速7月の夏休みを利用して教職員間でのドキュメンテーションの作成・交流会を実施した。

奈良教育大学教授 横山真貴子先生に、ドキュメンテーションの意義や作成方法についてご指導いただいた後、各就学前施設から遊び込んでいる幼児の写真を持ち寄り就学前施設・小学校の教職員が合同で、6グループに分かれてドキュメンテーションを作成・交流をした。遊びや生活の中にある子どもの学びや育ちを小学校の先生方と「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」〔10の姿〕を用いて共有でき



ドキュメンテーション作成・意見交流

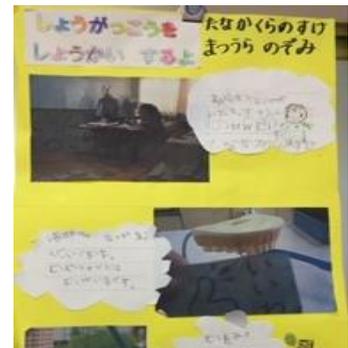


ドキュメンテーション完成

たことは、互いの教育を知り学ぶことへとつながった。どのグループも熱心な討議となり、意義深い合同研修となった。環境を通した教育を大切にしている幼児教育の中で育まれた資質・能力が、小学校の教科につながっていることや、施設種を超えて、互いに子どもの育ちについて語り合い、可視化し伝え合うことが「連携・接続」にとって大切であるという

ことが分かった。明らかに1年目とは違う教職員同士の気付きがあり、交流会後は6グループがそれぞれ仕上げたドキュメンテーションを互いに見合う時間や、グループごとに小学校の先生方が代表で発表するなど実りある時間となった。

また、子ども同士のドキュメンテーション交流では、1年生が大きな模造紙に、小学校で過ごしている様子を写真と園児の姿を思い浮かべながら、習いたてのひらがなを用いて、就学前施設に知らせ、それを受けて就学前施設では、教職員が、幼児の学びの芽を捉え、子どもたちの姿を写真やコメントを書き入れるなどして、ドキュメンテーションを作成し、送り届け交流を深めてきた。ドキュメンテーションを取り入れたことで、互いの教育を理解するツールとなった。



小学校から就学前施設へのドキュメンテーション

○ドキュメンテーション (documentation) とは?

神戸大学大学院 准教授 北野幸子先生による2017年「ちゃいるどネット OSAKA」より引用

- ・もともとは、「文書や記録」を意味する。
- ・「ドキュメント」ではなく「ドキュメンテーション」単なる子どもの姿やそれに関する保護者の感想等を記録した「ドキュメント」とは異なり「変化」を意識した記録である。つまり、「プロセスを描く」ということ、どんな移り変わりがあるのか、発達や育ち学びの視点であると同時に、育ててほしい子どもの姿への願いが込められている。

○ドキュメンテーションの作成方法について

1)トピックス、テーマを考える

伝えたい子どもの姿、保育の様子、遊びや生活の姿を選び、遊びや生活の中にある、子どもの育ちや学びの場面を見つける。

2)子どもの興味や関心を可視化する

子どもが何に興味や関心をもっているのか、その興味や関心の変化について可視化し、伝え、子どもの好奇心が感じられる場面、それが深まる様子など、保育の場面でドキドキしたりワクワクしたりする様子を伝える。

3)子どもの育ちや学びを可視化する

子どもたちが体験的に学んでいる様子や、体験を共有している姿を伝える。

(例 アイディアを出し合う・イメージを共有する・試す・没頭するなど)

4)育ちと学びの過程を説明する

発達の姿、変化、5領域との関係を意識し、保育者の願いや保育のねらいを説明し結果のみでなく、子どもの意欲や創意工夫、自尊心、思いやり自制心等の心の育ち・思考力・試行錯誤・学びの芽のプロセスを伝え、保育者の教育的な意図、育ちの見通し、環境構成や援助の工夫なども表現する。保育実践が遊びと生活を中心とした教育実践であるということを発信する。



7月 保幼小 ドキュメンテーション合同研修会

【2年間の研究の成果】

(1)教育の特性についての相互理解

教職員同士が顔見知りになり、互いに歩み寄るといふこと、施設長のみならず、教職員全体で、ドキュメンテーションの作成・交流を通して可視化する機会は、子どもの学びが、どのように発展していくのかを互いに理解する一歩となり、資質・能力をつなぐことの大切さを学んだ。

(2)連携・接続の方法や体制づくりの工夫

「遠いから」、「やり方が分からないから」しないのではなく、互いにできることから始めることにした。今年度、初めて小学校児童と就学前施設の子ども同士の交流方法としてドキュメンテーション写真や動画を取り入れた。互いに相手のことを思いながら、考えたり、思いを文字に表したりする交流方法は、児童の学ぶ意欲を高めることにつながるということが分かった。就学前施設の子どもたちも文字に興味をもつきっかけとなった。

また、就学前施設の教職員が小学校におもむいて活動を共にする機会をもてたことで教育活動のつながりを見通しつつ、教育上の課題を共有しながら進めることが重要であることが理解できた。

【課題】

今後も、相互参観等を通じて教職員同士が互いの教育について学び合うとともに、接続期のカリキュラム作成への積極的な取組等についても行っていきたいと考えている。

4 指導講評 講師：奈良教育大学 横山 真貴子 教授

●公開授業について

接続 1年生 国語科「どうぶつのあかちゃん」

幼児期での話し言葉、身体を動かしながらの表現が、どのように文字に変わっていくのか。幼児期の体験から1年の道のりがあると感じた。お散歩交流で友達と読み合う表情がとてもいい表情だった。

連携 2年生 音楽科「ボディーパーカッションであそぼう」

担任の先生と幼稚園の園長先生の息がぴったりで、丁寧に打ち合わせをされたので

あろう様子がうかがえた。連携の在り方は子ども同士、教職員同士といった形にとられず、いろいろな形態でできるということを感じた。

交流 5年生と5歳児のシャボン玉交流

幼児期は具体物を見せながら保育をしているので5年生が実際に物を見せながら説明しているのがよかったし、5年生が緊張しながらも打ち解けていき、優しいまなざしを向けるなど、変わっていく姿が見られた。

●2年間の取組について 取組成果を3つの観点で

(1)子どもの育ちと学びをプロセスで捉える

乳児期からの資質・能力を小中高までつなぐ、長い観点で見ていくものである。

5歳児と1年生という接点だけではなく、幼児期の教育から高等学校教育までを見通し育成を目指す。古市小学校では全校で取り組んでいることが大きな特徴である。

(2)連携・接続のためのツールの提案

ドキュメンテーションの活用→つなぐにあたってやりやすいツールである。

ものを伝えていく、もって行ける、残せる等のよさ。

(3)多様な連携・接続のありようを示す

- ・連携…2年生と幼稚園の園長先生との音楽科授業
- ・交流…5年生と5歳児のシャボン玉交流
- ・接続…1年生の国語の授業

先生同士、子ども同士だけでなく組み合わせがいろいろで、考え方の幅を広げて見せてもらった。

●ドキュメンテーションとは？

自分の保育をみんなに見せて開いていく

→ 意見をもらい語り合う。子どもの学びや育ちの共有

→ 次の実践、展開に生かす。保育のPDCAサイクルを支える。

そのための大事なツール。変化するプロセスを見ていく。

●なぜ、保育でドキュメンテーションなのか？

小学校では評価の規準、ねらいは明確だが、幼児教育では学びや育ちが見えにくい。

→子どもの学びや育ちの可視化。保育をした後、どんな学びがあったのか振り返るツールが必要。テーマで追ってもいい、月、週単位で作って変化を見てもいい。見えにくいから見えるようにする。見えるから分かち合える。教職員だけでなく保護者や地域の人にも開いていくことで、社会に開かれた教育課程にもつながっていく。

●Cブロックにおけるドキュメンテーションの活用

【7月の研修会】

自園所での保育実践の写真を持ってきて小学校の教員に語る。→小学校教員が読み取り発表。保育現場の写真（自園所のいきいきする写真）→そこにある学びを小学校教員が読み取り意味付けしてくれた。小学校教育のどこにつながるのか、教科の中に入っていくものを取

り組んでいるという意識がもてたのではないか。

幼児教育の現場では、保育で育てている力がどこにつながるか知る必要があり、幼児教育が問われている。(つなぐに足ることをしているか？楽しいことを自信をもってやっているか？) ドキュメンテーションにキャッチをつけることで伝わりやすい。

【施設間交流】

- ・遠いから「連携・接続」できないとは言えない。
- ・橋渡しをする先生がいて、その人を介して子どもたちがつながっていく。
- ・いろいろな連携のやり方がある。

●多様な連携・接続のありようを示す

- ① 接続 遊びの中にある幼児期の体験的学びを教科学習に生かす。
自分の経験が学びの教科につながっていく。(例：ひらがなの学習)
- ② 連携 保幼小間(管理職、教員、保育者)での連携ではあるが、各自園所内でも連携がなされている。いろいろな連携の在り方を示していただいた。
- ③ 交流 子ども同士、先生同士だけでなく、子どもが会わなくても子どもへの思いをもった先生が関わる、いつもと違う先生の話聞く、いろいろな人と出会って話を聞くという経験は幼児期には大切なこと。

●まとめ

○保幼小連携・接続をするのは何のため？

「それは、子どもの幸せのため。その時期、その時期をその子らしく生き生きと過ごせるため。つなげたいのは『心』です。乳幼児期に大切にしなければならないこと、小学校へつなげていきたいと考えることはたくさんあります。けれど、その中で一番大切にしたいのは『子どもの心の育ち』だと思います。」

○連携・接続のポイント

- ・その1 名前と顔がわかる関係
- ・その2 園や学校を見せてもらう
- ・その3 交流は回数ではなく質
- ・その4 やってよかったと実感できること

(京都市子育て支援総合センターこどもみらい館第4期研究プロジェクト 子ども心の育ちの連続性研究プロジェクト 2018『保幼小連携・接続ちょこっとハンドブック』より引用)

「子ども理解や子どものため」その思いで先生たちがつながり合っていける。その思いが子どもの心の育ちにつながっていく。

5 参加者のアンケートから

- ・保幼小連携・接続の第1歩は、各教育、保育の中身を知っていくことだと感じた。公開保育、交流、見学などを通して、教職員がつながり、子ども同士もつながっていく、接続されていると感じた公開授業、研究発表会だった。
- ・小学校の先生より、子ども一人ひとりを知っていくことを大切に取り組んできたと話聞き、保育所で大切にしていることが引き継がれていることがとてもよく分かった。
- ・現在、交流活動ということに、難しさを感じているが、交流の仕方は様々あることを学ばせていただいた。まずは、教員同士で学びの接続を共通理解したいと思った。幼児教育で大切にしてきた、一人ひとりの思いを大切にする授業を是非広めていけたらと思った。
- ・ドキュメンテーションの活用や、先生と子どもの交流など離れていてもできることを明示していただいた。小学校の先生方が、幼児のことを知ろうと思われた力がすごくよく伝わってきた。
- ・1年生、2年生、5年生の公開授業を見せてもらい、それぞれに接続・連携・交流のテーマがあり、テーマに沿って見学し内容を捉えることができた。古市小学校の取組を聞き、子ども理解を一番に考えることによって、保育所、幼稚園から小学校への接続がスムーズにできることがとても分かりやすかった。
- ・ドキュメンテーションのことも知り、保育の振り返り、展開していく中で、自園でもやってみたいと思った。

5年生 「しゃぼん玉遊び」(保育所5歳児さんとの交流) 活動計画案

5年1組 (在籍 39名) 指導者 池田 智子

森小路保育所 5歳児 (在籍 28名)

〈本時間のねらい〉

- 幼児と遊ぶことにより、優しい態度で接しようとしたり分かりやすい言葉を選んで話したりしようすることができる。(自尊感情を育てる)
- 物の溶け方に興味を持ち、しゃぼん玉液の工夫について考えたことを生かしながら活動を楽しむ。(自然科学への気づきを高め広げる)

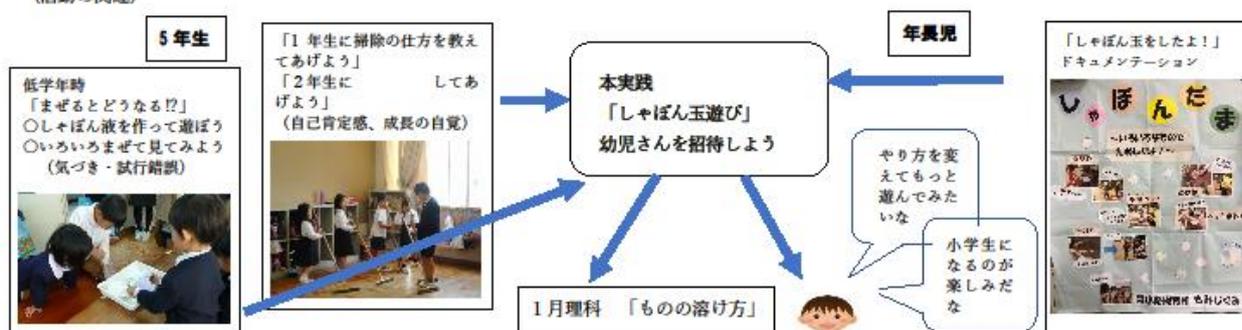
〈5年生の児童の実態〉

本学年は創意工夫をすることが好きな児童が多い。本校は低学年の時から「探求ウォッチ」という時間をもち生活科の中でも、自然の中での気付きや試行錯誤を大事に教育活動を行ってきた。しゃぼん玉遊びをする年長児の様子を保育所からのドキュメンテーションで知った子ども達は、「低学年の時にしゃぼん液を作って遊んだな」と懐かしそうに思い出話をしている。そこで、年長児の遊びが、もっと楽しくなるように手作りのしゃぼん液を教えてあげよう、ということになった。

またこの時期、高学年としての自覚や自己肯定感を高めるために低学年との交流を多く取り入れている。「教えてあげる」という活動が成長した自分を実感させ、自信に繋がっている。そのような活動の流れからも、「幼児さんを招待して楽しませてあげたい!」という動機付けとなった。

そして、1月の理科の単元「ものの溶けかた」にも繋がるように、しゃぼん玉液の濃度の適量にも気づかせ、教科学習にも連続できると考えている。

〈活動の関連〉



本日の活動の流れ

- ① 初めの挨拶
- ② 活動の紹介
- ③ しゃぼん玉遊び交流
- ④ 振り返り
- ⑤ 終わりの挨拶

〈5歳児 もみじぐみ〉

○子どもの様子

28人という集団で個別支援のいる児童も含めひとり一人の個性が強く、それぞれが好きな遊びを楽しむ中では思いのぶつかり合いからトラブルになることも多い。半面友だちの面白そうな遊びに気づいてまねて試したり協力したりしながら工夫して新しい遊びを発見するような姿もあり、保育士も共感することでさらに遊びを発展させている。

○本時間までの遊びの関連

やってみよう、試してみよう、工夫してみようという気持ちが満たされる遊びの環境を用意する。友だちとどんなものを作ろうかと話し、牛乳パックを組み合わせた家やボーリング、レールの玉転がしなど共通のイメージを持って友だちと一緒に作ることを楽しんでいます。就学前健診に行ったことでお兄ちゃん、お姉ちゃんにあこがれの気持ちを持ち学校生活に期待や楽しみにしている姿が見られる。

〈今日の活動場所〉

ケーキ作りに挑戦しようコーナー
・石鹸を削って泡立ててみよう

校舎

道具を工夫しようコーナー①

- ・泡しゃぼん玉
- ・こんな道具でシャボン玉 (うちわ・モール・針金・サランラップの芯など)
- ・色しゃぼん玉

自由にシャボン玉を楽しむスペース

道具を工夫しようコーナー②

- ・大きいシャボン玉
- ・たくさんのシャボン玉

校門

しゃぼん液研究所
・いろいろな濃さのしゃぼん玉液を作ってみよう
上手くふくコツ教えますコーナー
・優しく一緒に遊びます